



日本仏教心理学会

第8回学術大会

大会テーマ:

『トラウマケアと災害支援から学ぶ』

プログラム・要旨集

高野山大学

2016年10月15日(土)、16日(日)

*The 8th Annual Meeting of  
The Japanese Association for the Study of  
Buddhism and Psychology  
Program and Abstracts  
15th and 16th of October 2016  
Koyasan University*

## 目次

日程表	2
高野山大学案内図	3
校舎案内図	4
公開講演 及び 公開シンポジウム	5
個人発表	6
個人発表 発表要旨	8
交流タイム 分科会紹介	16
第8回大会実行委員会委員・メモ	20

表紙の写真 高野山根本大塔：鶴島英樹 撮影

## 日程表

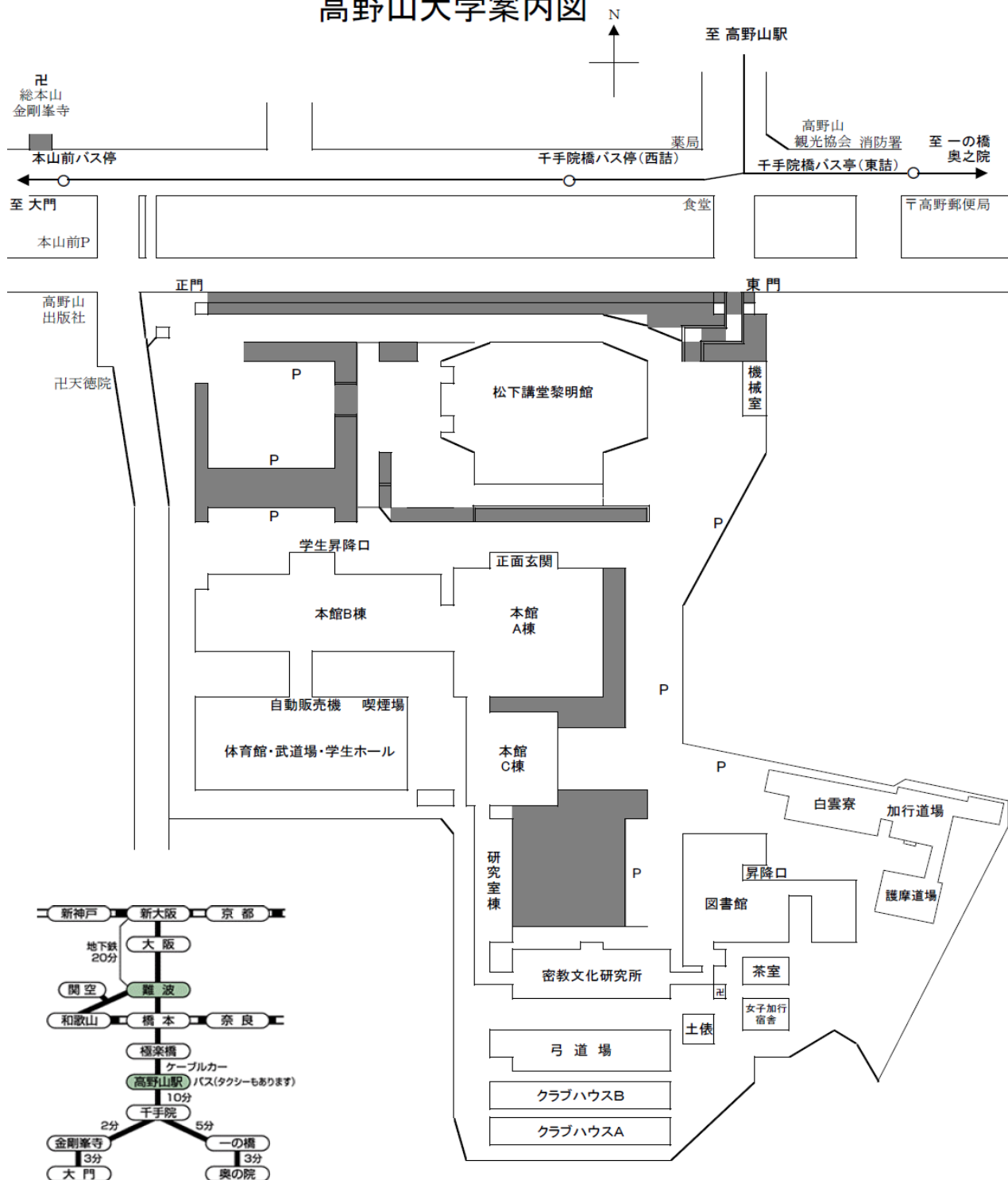
10月15日（土）

12：30～	受付開始	本館A棟2階正面
13：00～13：10	開会式	第3会議室
13：15～14：30	基調講演	（同上）
14：40～16：20	シンポジウム	（同上）
16：30～17：20	総会	（同上）
18：15～20：00	懇親会	無量光院

10月16日（日）

9：00～11：00	個人研究発表	第3会議室および203号教室
11：10～12：10	分科会	第3会議室、203、204、205、206、207号教室
12：20～12：30	閉会式	第3会議室

## 高野山大学案内図

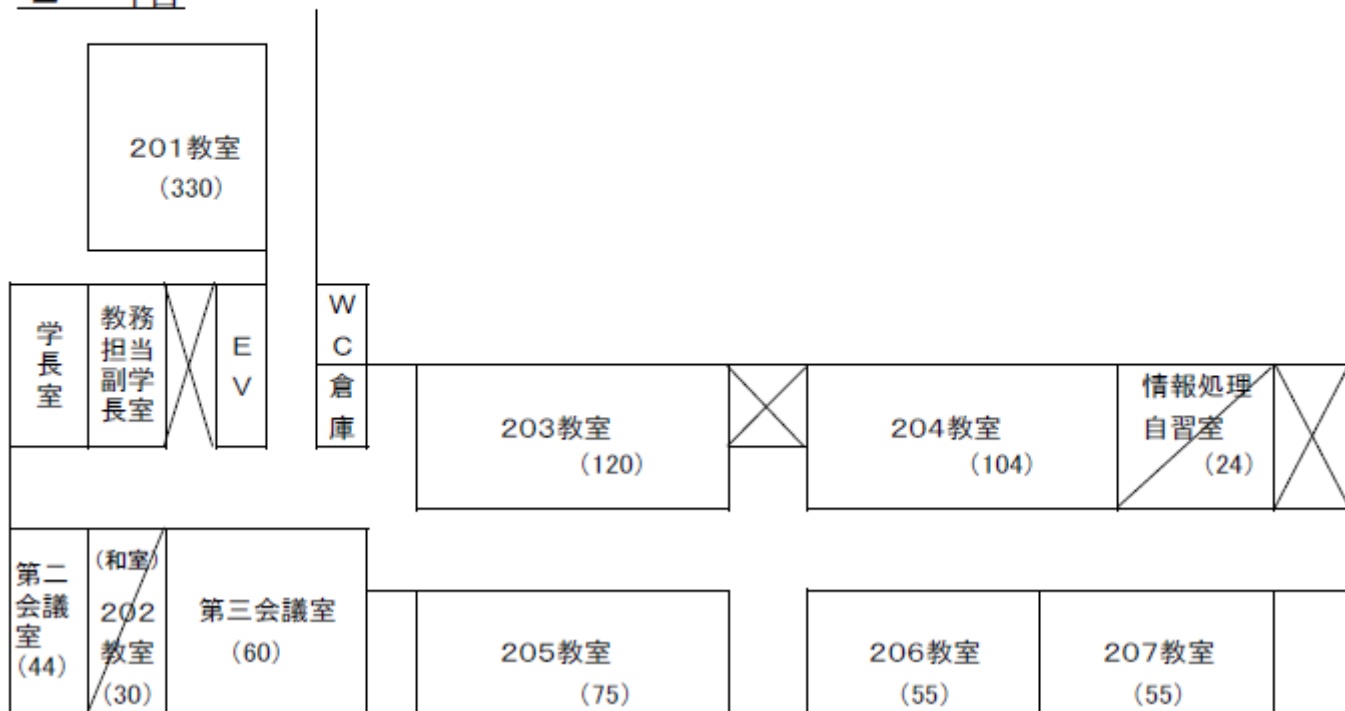


### 所要時間

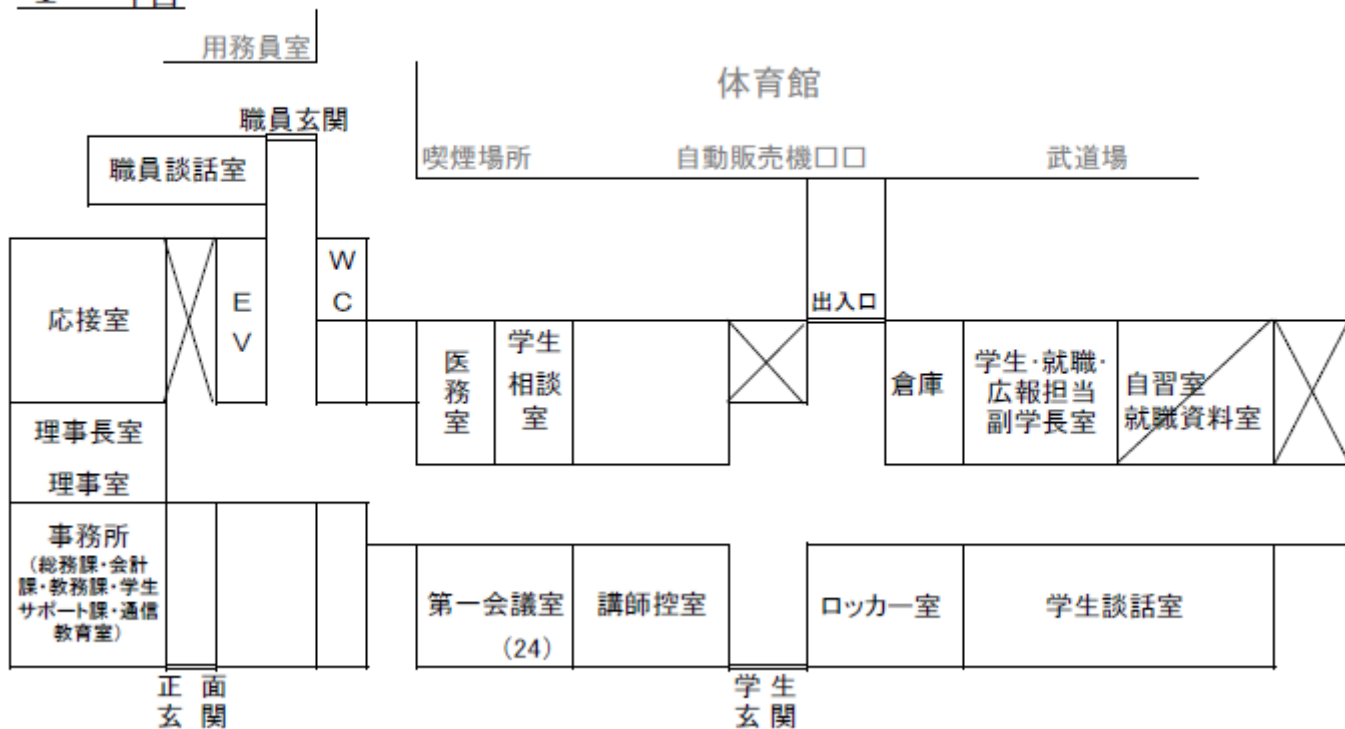
- 南海高野線難波駅より高野山駅まで、特急で1時間30分(1日4本)、急行で1時間40分  
高野山駅より千手院橋バス停まで約10分、バス停より徒歩2分
- 和歌山・奈良方面からは、JR和歌山線橋本駅で乗り換え→南海高野線
- お車の場合は、山麓の九度山町より高野山道路(国道370・480号)を  
經由して大阪より約3時間。

# 校舎案内図

## 2階



## 1階



## 公開講演

時間	第3会議室（本館A棟2階）
13:15 ～ 14:30	「災害支援の現場から学んだこと ートラウマケアを中心として」

発表者： 加藤 寛（兵庫県こころのケアセンター長）

司会： 井上 ウィマラ（高野山大学）

## 公開シンポジウム

時間	第3会議室（本館A棟2階）
14:40 ～ 16:20	「災害支援のために仏教心理学が準備すべきこと」

パネリスト： 黒木 賢一（大阪経済大学）

「阪神淡路大震災の体験から」

井上 ウィマラ（高野山大学）

「東日本大震災復興支援から学んだこと」

加藤 寛（兵庫県こころのケアセンター長）

「基調講演からのコメント」

司 会： 森岡 正芳（立命館大学）

## 個人発表

時間	第1部会	第2部会
	第3会議室（本館A棟2階） 司会：黒木 賢一（大阪経済大学）	203教室 司会：大山 覚照（市立池田病院）
9:00 ～ 9:30	太田 俊明 （西山浄土宗僧侶） 「『蘆屋道満大内鑑』を通じた 宗教心の考察」	仲 紘嗣 （社会福祉法人協立いつくしみの会 特別養護老 人ホーム かりふ・あつべつ 医務室） 「認知症高齢者における幾つかの医療選択と 本人の意思～特養の現場から「生老病死」を 考える～」
9:30 ～ 10:00	妹尾 法諭 （高野山真言宗僧侶・臨床心理士） 「護摩祈祷における心理的変容の研究」	真柄 希里穂 <sup>1</sup> 、鮫島 有理 <sup>2</sup> （ <sup>1</sup> 種智院大学 <sup>2</sup> 帝京科学大学） 「精神障がい者の死生観および宗教観 — 仏 教観を基軸にした精神障がい者の終い方の今 日的課題—」
10:00 ～ 10:30	戸田 弘子 （宇部フロンティア大学） 「恩田彰先生が わたくしたちに残されたもの」	井上 ウィマラ （高野山大学） 「仏教瞑想に基づいた 医療者の燃えつき防止プログラムについて」

10:30 ~ 11:00	バイヤー・アヒム (金沢星稜大学) 「正念と正定の文化的文脈—現代のマインドフルネスを比較文化の視点から見る—」	井上 孝代 (井上孝代マクロカウンセリングセンター (MCC 目黒)) 「東北大地震の支援活動のなかから、PTG (Posttraumatic Growth) を研究した立場から、特に第4因子のスピリチュアルな体験」
---------------------	----------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

※ 個人発表は、発表15分、質疑応答10分です。

※ 発表12分で1回目のベルが鳴り、15分で2回目のベルが鳴り、25分で3回目のベルが鳴ります。

※ なお、プログラムを時間通りに進行するため、質疑応答時間の延長はいたしませんので、あらかじめ、ご了承ください。

## 個人発表 発表要旨

9:00~9:30 第1部会 第3会議室（本館A棟2階）

### 「『蘆屋道満大内鑑』に関する宗教心の考察」

太田 俊明（西山浄土宗僧侶）

竹田出雲作『蘆屋道満大内鑑』は享保十九年大坂竹本座にて初演。一般的に蘆屋道満は安倍晴明のライバルであるが、本作では主人公である。平成21年国立文楽劇場錦秋公演にてコラム執筆が縁で観覧した際、蘆屋道満のエピソードを通じて神仏習合を背景に相互に補完しあっていることから「心身を超えた何か」を感じたことが印象に残っている。

それは何だろうか。舞台演出を通じてのものも確かに存在する。また主要な章段である「葛の葉子別れの段」は感動的でありかつ、強いインパクトをうける。しかし、それ以上に「神仏習合」的な要素が宗教心を起こさせる何かがあるのではないかと感じた。

そこで、仏教と心理学を統合しようとする運動体である仏教心理学としてどのように取り上げていくべきか。宗教間対話や日本人論を含め幅広い問題を示唆する萌芽として考察するべき点は多いが、まずは以下の3つが問題になるのではないだろうか。

- 1 科学と宗教の接点である「宇宙」に関する問題。特に物理的な宇宙観と宗教的・心理的な宇宙観との混同が当時だけでなく今なお続いているので、概念分けを明確に行う必要がある。その上で接点・統合を図る必要があるのではないか。
- 2 それとともに神仏習合の宗教心の展開について神仏（超越性）から現実場面への「法」の展開が課題となる。勧善懲悪や子別れは「法」の展開の一つのツールとして心理学的にどのように位置づけていくか考察する必要がある。
- 3 同時に神仏分離以前の日本的な宗教観、現代における宗派意識一辺倒の宗教者内部の構造とは異なる、宗教観に対する心的なアプローチの復元。この復元は、明治維新と太平洋戦争の二段階の変化を経た我々にとって困難な面があるものの、「仏教書以外の文献を活用することで」その萌芽とすることが出来るのではないか。また復元作業を通じて、宗教観対話において従来の「各教団の特色を前面に配置した」差異を重視した対話でなく、内面の「一なる次元に対するアプローチ」中心の対話への変化と言ったパラダイム転換に活用出来るのではないか。ここからコミュニケーションを中心とした対話的アプローチによる考察は可能と考えられる。

本発表では『新日本古典文学大系93 竹田出雲 並木宗輔 浄瑠璃集』（国立文楽劇場本）を用い、コミュニケーション論の立場から内容を俯瞰し構造を展開・考察するものとする。（本発表は2013年9月7日「日本宗教学会（於國學院大學）」で行った「『蘆屋道満大内鑑』に関する一考察」の続編であり、その際はトランスパーソナル心理学におけるライフサイクル論を中心に発表した。）



9:30~10:00 第1部会 第3会議室（本館A棟2階）

「護摩祈禱における心理的変容の研究」

妹尾 法諭（高野山真言宗僧侶・臨床心理士）

私は高野山真言宗の僧侶である。現世利益的行動と謂われる「祈禱」を修法する者であり、「臨床心理士」である。

護摩祈禱を終えた祈願者から筆者は、「心がひとつにまとまり集中力が出た」とか、「肩の荷が降りてこことからだだけが軽くなり清々しい気分になった」という心理的変容を思わせる内的体験や、「仏や修法中の内陣から諸真言や般若心経とともにありがたいものが伝わってきた」との感慨を聞いたことがある。

これまでの先行研究においても、加持祈禱を受ける側にさまざまな心理的・生理的現象が生じていることが記述されてきた。しかし、お参りの方がどんな心理的変容をたどっているのかを具体的に示した調査研究はなされていない。

これが困難であった理由は、お参りの方は年齢、性別、護摩祈禱の回数、信仰心、心情などの条件などの違いにより同一のサンプルを確保しにくいためである。一方、同じ護摩壇で修法する修法者であれば、条件がそろってまとまったサンプルを集めやすい。そのために、むしろ修法者の方が研究対象になりやすいと考えられる。にも関わらず、修法者を対象とした研究はあまり多いとは言えない。

もし修法を一つの臨床の〈場〉と見なすならば、修法者に心の変容が生じるとき、同じ護摩堂の中にお参りの方も同様の心の変容が共時的に生じているとの、深層心理学的解釈が成り立つのではないだろうか。

この仮説に基づき、本論の段階における調査では、お参りの方ではなく護摩祈禱を修法する側（修法者）を対象として選んだ。

護摩修法者からインタビューをさせてもらい、修法者の対応と態度を聞き取りながらどのように心理的変容が起こっているのかを探ることにする。

インタビューは、半構造化面接とする。10問程度の項目により回答を得る。半構造化面接に対するインタビュー調査については、筆者自身が護摩祈禱を2~3回程お参りの方と一緒に受けた体験などからインタビュー項目を作成する。

10:00~10:30 第1部会 第3会議室（本館A棟2階）

## 恩田彰先生がわたくしたちに残されたもの

戸田 弘子（宇部フロンティア大学）

昨年7月に逝去された本学会初代会長恩田彰先生を偲び、教育心理学研究・仏教心理学研究・霊性の探究の3つの観点から、浩瀚なご業績の一端を顧みたい。

### 1 教育心理学者としての恩田先生：創造性の研究

恩田先生のご主要な業績として、時期的にそして著作の量においても筆頭にあげられるのが「創造性」の研究である。

恩田先生は、「新しい価値あるもの、またはアイデアを創り出す能力」が「創造力」であり、「それを基礎づける人格特性」が「創造的人格」とであると定義される。この「新しい価値」は、社会変革をもたらす画期的発想だけでなく、個々人にとっての新しい体験を意味する。子どもたちの未来も発達のある方も一律には括れない。すべての子どもたちが育ち行く潜在力への温かい眼差しが籠るお言葉の数々は、公教育現場に課せられる絶対的評価規準や能力到達度に於ける個々の子どもたちへの均質的評価要請に違和感を抱く、今日の現場の教育者殊に特別支援教育に携わる、教諭の心にも深く響くのではなからうか。先生の創造性教育理念とは対照的な今日のADHD「治療」理念との対比を示したい。

### 2 仏教心理学者としての恩田先生：禅とカウンセリングの比較研究

心理学領域で「創造性」と記されるものは、仏教で言う「智慧」とであると恩田先生は言われる。先生は一貫して「智慧（＝創造性）」を探究されてきたのだと思う。心理療法やカウンセリングの究極目的は創造性の開発にあり禅の目的と一致する。双方は代わり得ないが共通点は何れも「人格変容を目指すこと」である。例えばフォーカシングは瞑想法の一つであり、無意識的体験の意識化つまり「気づき」が治療に結びつくことが「悟り」と同一である。このように先生は瞑想他多くの身心技法の実践体験から、通常のカウンセリングの中にも、禅と類似の体験過程が生起することを解明されてきた。これら諸論者は、日本の風土に真に根ざした心理臨床の展開を志す者が必ず踏まえたい文献であろう。先生の論者が他の心理学徒の目途を同じくする書き物と一線を画すのは如何なる点にあるのかを述べたい。

### 3 霊性研究者としての恩田先生

初期の創造性研究に於いて、シネクティクス技法の「人格的類比」に関する論考[自己催眠により物（鉛筆や万年筆）に人格転換する（自分がその「物」になる）ことで商品開発に結びつける事例]等があり、先生はこれを禅や瞑想体験に準えて語ってこられた。

初めてお出合いしたとき先生は既に霊性研究の第一人者であられた。しかしその認識があったわたくしにも、2007年の共著『心理療法とスピリチュアルな癒し』の先生の章には驚嘆せざるを得なかった。先生のいま一つの権現身（仮の現し身）との出会いとも思われた。本章への拙論者を通し、ご生前に先生から頂いた或る公案に再び向き合い、わたくしなりのお応えを言葉に致せるよう努めたいと思う。

10:30~11:00第1部会 第3会議室（本館A棟2階）

正念と正定の文化的文脈—現代のマインドフルネスを比較文化の視点から見る—

バイヤー・アヒム（金沢星稜大学）

仏教經典によると、解脱を求める仏弟子は文化的文脈の如何に関わらず、八正道に従い、四聖諦を証得すべきである。あるいは、大乘の菩薩道に従うのであれば、さらに、十地・五道を実現せねばならない。これら仏教の実践道は、国家、言語、気候などに関わらず、全ての人間にとって平等な道である。ジャータカ等によれば、人間以外の動物でさえ、ある程度この道を歩むことができる。

パーリ經典において、仏陀は相手に応じて様々な行動規範を与えており、俗人と出家者では、歩むべき道も目指すべき地点も、大きく異なっている。部派仏教を経て大乘仏教の時代になると、止・観の扱いなども含めて、戒・定・慧それぞれの違いが歴然としてくる。地理的観点からすると、仏教は古代の世界に広く伝播するに随って、地域、国家、言語を異にする多種多様な文化に溶け込んだ。

現代のグローバル化した世界を見渡すと、夥しい数の国際的な仏教の潮流が生まれている。著名な仏教者の本は即座に様々な言語に翻訳され、瞑想の指導者は世界を回って、セミナーを開催したり、センターやグループを設立している。一見すると、こうした国際的な仏教の潮流には、地域や参加集団の明確な境がないように思える。特に近年、世界的な流行を見ている「マインドフルネス」は、世界中の教養人が広く実践するところとなっている。理論の上では、三摩地や無想無念の究極的体験は、年齢、性別、収入、教育の区別が無いのはもちろんのこと、そもそも宗教とさえ無関係である。しかし、本研究では、三摩地やマインドフルネスの主観的体験や実践ではなく、そうした体験や実践が現に生じているところの文化的文脈を主題とする。

研究の方法論としては、世界中の個人的および集団的実践、そして、瞑想とマインドフルネスに関する書物を仔細に分析する。文化の様相を考察するに際しては、比較文化論の研究者ゲルト・ホフステーデ (Geert Hofstede) が提示した5つの「文化の次元」を使用する。その上で、例えば実践の文脈における個人主義と集団主義を考察する。同様に、指導者と実践者の間に生じる階級制度や力関係等、様々な文化的様相の具体例を観察する。取り上げる集団および著者は多岐に亘るが、特にドイツと日本における瞑想およびマインドフルネスに重点を置く。

9:00~9:30 第2部会 203教室

認知症高齢者における幾つかの医療選択と本人の意思

～特養の現場から「生老病死」を考える～

仲 紘嗣（社会福祉法人協立いつくしみの会 特別養護老人ホーム かりぶ・あつべつ 医務室）

高齢者および認知症を持つ人々（以下、認知症高齢者）は、病院受診および救急搬送・胃ろうに代表される人工的水分栄養補給・人生の最終段階で経口摂取や点滴・さらに延命医療等の医療選択に直面することがしばしばある。2010年6月以降の5年間に当施設に入所していた151例について、上記の医療選択に対して、自分の意思をどのように伝えていたかを調査した。

病院受診および救急搬送では17例が望まずまたは拒否していた。胃ろうに対しては、23例中20例は拒否的ないし否定的であり、自分の意思で胃ろう造設を希望したのは2例のみであった。人生の最終段階での経口摂取や点滴拒否は10例であった。延命医療を望んでいなかったあるいは望んでいないは15例であった。重複例を除くと、医療選択に意思表示したのは49例（約25%）であった。これらの約44%はかなり高度な認知機能低下がみられたが、短い言葉または非言語的仕草などで意思表示していた。「自然で穏やかな最期」を望んでいる認知症高齢者は少なくない。多くの人々が進歩した医療の恩恵を受けるのが当然と考えている時代に、医療を受けたくないとの意思表示をした場合には、本人の思いが届かないこともしばしばある。これらの医療選択はいずれも「生老病死」に関わることであり、「いのち」の問題はさまざまな考え方・立場がある。過剰な医療・過小な医療をめぐって現在議論が続いている。近年の欧州での生命倫理では「執拗な治療も安楽死もしない（過剰でも過小でもない）」全人医療が提唱されており、演者らの考えてきた「身心一如（しんしんいちにょ）の全人的医療」（第2回本学会口演発表）を改めて検討したい。

9:30~10:00 第2部会 203教室

「精神障がい者の死生観および宗教観

—仏教観を基軸にした精神障がい者の終（しま）い方の今日的課題—

真柄 希里穂<sup>1</sup> 鮫島 有理<sup>2</sup> ( 種智院大学<sup>1</sup> 帝京科学大学<sup>2</sup> )

精神障がい者の死亡率の高さは、深刻な問題であり、早急に対処すべき問題である。米国で実施された16州メンタルヘルス業績評価(Lutterman et al.,2003)の調査によると、精神障害の診断を受けた人々は、一般の人よりも平均1~10歳若く死亡し、さらに重度精神障害者では、25年早く死亡するという。わが国では家保(1989)の調査した研究で、精神障がい者(統合失調症患者)の一般住民に対する死亡の相対死亡比と死因を調査した結果、統合失調症患者が一般住民に比して有意に高い相対死亡比を認めたのは、男女共に自殺であった。自殺予防対策自体は厚生労働省等においても進められており、「精神障害者支援機関等における自殺総合対策ガイドライン」(東京都多摩総合精神保健福祉センター,2011年)も発行されている。しかし、精神障害者が「死」についてどのような意識を持っているかについての研究は少ない。

精神障がい者に死生観を問うことについては慎重論が主流であるが、その主たる意見は「精神的な負担が大きすぎる」「本人に伝えたら再発してしまう」というものである。精神障がい者の自覚的なレジリエンス研究、スピリチュアリティとの正の相関が認められた研究はあるものの(水野2015)、精神障がい者に「死生観」を尋ねた研究はないどころか、「死」はタブーの領域となってしまうため、死について語ることもできず、より死の不安を大きくしていることも否めない。

そこで本研究では、地域生活を営んでいる精神障がい者の死生観を自記式質問紙調査から明らかにするとともにそれを分析し、自殺防止をも含んだ死生観尺度およびその活用を検討することとする。

精神障がい者自身の死に対する考え方を知ることは、疾病と障害を抱えてきた苦悩を和らげるか手がかりになるばかりか、死の準備教育にも活用できると思われる。また、波平(1993)は、「宗教は、人間存在の基本的概念を明確にし、死後の世界や霊魂についての観念を体系的なものに整えるうえで大きな影響力をもつ。より正確には、死を扱うからこそ宗教は成立するのであり、人間の死についての何の観念も行為の形も明確にしなければそれは宗教ではない」と述べていることから、死生観だけではなくわが国の仏教観を併せて調査し、分析することで、支援者のアプローチの今日的課題についても言及したい。

10:00~10:30 第2部会 203教室

「仏教瞑想に基づいた医療者の燃えつき防止プログラムについて」

井上 ウィマラ（高野山大学）

本発表では、ジョアン・ハリファックス老師が医療関係者たちと作り上げた医療者の燃えつき防止プログラムであるGRACEについて紹介し、伝統的な戒定慧の観点から考察することによって、彼らがどのように仏教を現代社会に再構築しようとしているのかを解明することを目的とする。

ハリファックス老師は医療人類学の博士号をもち、韓国禅の崇山禪師から禅の手ほどきを受け、日本の禅宗で学んだバーニー・グラスマン老師から印可を受けた。さらにその後、エンゲイジド・ブディズムを創始したティク・ナット・ハン師の法灯を受け継ぎ、ダライ・ラマからも親しく教えを受けている。その一方で、ハリファックス老師はアメリカにホスピス運動が上陸した70年代から、キューブラー・ロスと親しく交流を重ねながら死にゆく人々を看取る活動を続けてきた。終末期ケアの現場には大きなストレスが存在していて、その重圧に耐えられずに燃え尽きてしまう医療者も少なくない。

こうした状況から、終末期ケアの現場で働く医療者の燃えつきを防ぐために、マインドフルネス瞑想や慈悲の瞑想を基盤として、忙しく動き回りながら働かなければならない医療関係者たちが実践できるようなパッケージに仕上げたのがGRACEである。

GRACEとは、①gathering attention（注意を集中する）、②recalling intention:意図を思い出す、③attuning to self then others(自分に調律してから他者に波長を合わせる)、④considering what serves best(何が一番役に立つか考える)、⑤engage, enact, end(関わり、行動し、終結する)という5つのプロセスの頭文字をとったものである。これらのプロセスを戒定慧の視点から吟味することによって、彼らがどのように伝統的な仏教を再構築しようとしているのかを探してみたい。

また、GRACEの説明においては、脳科学のデータが重用されているが、日本のような伝統仏教の残存している社会においては、伝統文化の要素をどのように生かすかについても考察してみたい。

10:30~11:00 第2部会 203教室

「東北大地震の支援活動のなかから、

PTG (Posttraumatic Growth)を研究した立場から、特に第4因子のスピリチュアルな体験」

井上 孝代 (井上孝代マクロカウンセリングセンター (MCC 目黒) 代表)

2011年の東日本大震災後、自然災害や人災の復興支援を行う国際NGOのIsraAID(イスラエイド)との連携で、一般社団法人「日本イスラエイド・サポート・プログラム」(JISP)が設立された。本発表ではJISPのほぼ5年間に亘る活動である「ヒーリングジャパン」プロジェクトのグループ表現セラピーの実践および「東北の声」プロジェクトにおける”語り”をもとに、被災者・援助者支援の立場から報告し、ご意見をいただきたい。

東日本大震災の被災者の経験はトラウマ的な場合も多く、震災関連死者にもそのようなストレスの影響が考えられる。トラウマケアに対する「ヒーリングジャパン」プロジェクトによるグループ表現セラピーは、トラウマによってダメージを受けた言語野の力が要らず、グループ体験ベースで、感情を強く動かすことができ、現在・過去・未来を同時に体験でき、記憶の中に統合する力が強いことが示された。

また、「東北の声」プロジェクトは、東日本大震災の被災者の体験談(語り)を出来るだけ忠実に地元ボランティアの方々と共に映像に残し、貴重な史的資料として保存し地域住民と共有することを目指した。さまざまな被災者“語り”を分析した結果、つらい体験後においても、「心的外傷後の成長」

(Posttraumatic Growth: PTG)が認められた。PTGは第1因子「他者との関係」(Relating to Others)、第2因子「新たな可能性」(New Possibilities)、第3因子「人間としての強さ」

(Personal Strength)、第4因子「精神的(スピリチュアルな)変容」(Spiritual Change)、第5因子「人生に対する感謝」(Appreciation of Life)の5因子で構成される(Tedeschi& Calhoun,1996)。災厄からのリカバリーのために、またその後の質の高い人生にとって重要であることが認められた。

また、近年、援助者(helper)のメンタルヘルス面でのケアの必要性が大きく取り上げられてきている。今回は「援助者セラピー原則」(Helper Therapy Principle: HTP)の視点から、東日本大震災における援助者の語り(「東北の声」)を基に、援助者支援についても検討できればと願っている。

## 分科会

本学会において分科会の活動は、昨年の第7回学術大会より具体的に動き始めました。分科会の目的は、専門性や研究性を高めることはもちろんですが、年に一度の大会への参加だけでは希薄になりがちな会員同士の交流を、より密なものとして頂くことに主眼を置き、会員一人ひとりの所属感を高めることを重視しております。仏教と心理学という大変広い分野を扱う学会という性格上、会員の方々の関心領域は多岐に渡ります。分科会活動で、ご自身の興味・関心領域を掘り下げる良い機会としていただけたらと思います。なお、所属分科会が未定の方は、以下の紹介文を参考にされながら所属希望の分科会を決めていただき、大会2日目の分科会の時間にご参集ください（複数の分科会に所属可）。

<p><b>深層心理（唯識、アビダンマ、精神分析、分析心理学等）</b></p>	<p>佐久間 秀範</p>	<p>森岡 正芳</p>
<p>今回の分科会では仏教の場合と西洋の心理学の場合とでどのような歴史的推移でこころのあり方を扱ってきたかについて問い直すことから初めたいと思います。一般に唯識思想とフロイト・ユングの心理学とが「深層心理」という言葉で括られることがあります。しかし例えばアーヤ識という概念ができあがる過程と集合的無意識ができあがる過程とを見ただけでも、文化的思想的に大きな違いがあります。そこで共通する部分と異なる部分とを洗い出し、仏教学と心理学との学問分野の間にある垣根を見つめて行くことで、両者の間の有意義な研究が進められるような基盤づくりができればと考えています。今回の分科会のリーダーをたまたま佐久間（筑波大学・人文社会系）が担当することになりましたが、今後は複数の方方で運営できるようにして行きたいと思います。</p>		

<p><b>瞑想（実践、脳科学、禅、マインドフルネス等）</b></p>	<p>平原 憲道</p>	<p>藤野 正寛</p>
<p>「瞑想」分科会では、禅や密教等の伝統的な瞑想実践にのみフォーカスを当てるのではなく、近年科学界でも注目を集める「マインドフルネス瞑想」などを含め、幅広く瞑想を取り巻く課題を議論の対象にすることを目指している。方法論としては、仏教瞑想を理解しその仕組みや効果を解明するために、臨床・科学・文献・実践のそれぞれの立場から知識を共有し、多面的に議論していく。欧米で先行する瞑想の医学的・認知神経科学的な研究成果も積極的に紹介していく。</p> <p>リーダーには慶應大学医学部の平原憲道（専門は医療ビッグデータ・認知科学・意思決定）、サブリーダーには京都大学大学院教育学研究科の藤野正寛（専門は認知神経心理学・ヴィパッサナー瞑想実践）が務める。参加メンバーにはぜひ多方面からの視点を積極的に提供して頂きたい。柔軟な文理融合的な視点で刺激的な議論が行えることを楽しみにしている。</p>		



<p><b>仏教的ケア（スピリチュアルケア、子育て、看取り、グリーフ、トラウマ、緩和ケアなど）</b></p>	<p>井上 ウィマラ</p>
<p>子育て(チャイルド・ケア)から看取り(ターミナル・ケア)やグリーフ・ケアまで、ケアは人間にとっての本質をなす重要な活動です。現代社会では、こうしたケアは医療を中心に心理や教育関係の専門職の皆さんが支援してくださるようになってきていますが、その重圧は相当なものになってきている様子です。支援者の皆さんの重圧を緩和するため、現場で燃え尽きてしまわないよう具体的な方法とビジョンを示してゆくことは、社会的な貢献になるだけではなく、仏教自体の本質をもう一度見つめ直して現代社会に再構築するための機会にもなると思います。</p> <p>医療や心理療法のみならず企業研修などにも幅広く応用されていることが日本にも紹介され始めてきたマインドフルネスは、漢訳では「念」と訳されるもので、原語の sati は思い出すこと (sarati) を意味する言葉です。経典には、マインドフルネスのトレーニングには自分を見守ること、他者を見守ること、自他を見守ることの3つの視点が大切だと記されており、律蔵には看取りを含めた看病の相互の実践が出家修行者の間で為されていたことが伝えられています。マインドフルネスの守備範囲がとて広いことは、マインドフルネスがケアの本質に深く関わっていることを示唆しているように思われます。</p> <p>日本の仏教には真言、坐禅、念仏、題目など多様な修行法がありますが、どの修行においても心が対象から離れて雑念にとらわれてしまうということがあるものです。マインドフルネス(念)のトレーニングは、そうした雑念への対処の仕方に大切な示唆を与えてくれます。そういう意味で、日本仏教に伝わる様々な修行法を通して諸宗派のつながりを回復してゆくための基盤にもなりうると思われま</p> <p>この分科会では、マインドフルネスを中心として仏教の本質に深く広く立ち返ることを通してケアとは何かを探求し、それを仏教的なケアとして現代社会に貢献できる形で表現してゆける道を探してゆきたいと思います。</p> <p>具体的には、「こんな時、どうしたらいいのかなあ…」という困った事例について皆さんの体験智や情報を集めてゆくという形で、チャイルドケア→ターミナルケア→グリーフケア→チャイルドケアというケアの循環を生み出せるようなヴィジョンを持てるようになればよいと思っています。</p>	

<p><b>宗派間連携（社会貢献等）</b></p>	<p>三輪 是法</p>	
<p>日本仏教の特徴は、「専修化」と言われています。特化した修行によって、日本仏教は宗派性を持つようになり、それぞれ独自の信仰形態を保持してきました。その根幹には、各宗派が依拠する經典の違いがあります。</p> <p>本来、仏教は人間の生老病死などの実存にかかわる問題について深く考え、克服することを実現してきました。実際、日本仏教の祖師たちは、人々の苦しみに寄り添い、安心を与えるための多くの言説を残しました。しかし、近代以降、時代の推移とともに、そうした役割が科学的専門分野に委譲されているのが現状です。いま、あらためて人間を見つめ、人間の実存について深く考え、寄り添うことは、仏教を私たちがよりよく生きるための実践方法として再生させると考えます。特に、「心」の問題に立ち返るとき、日本仏教は宗派性を越えて、さらに国や民族を越えて、人間の心のあり方と生き方の問題により方向性を提示できるように思います。</p> <p>この分科会では、宗派の違いを前提にしながらも宗派性を超越していく研究、具体的には各宗派の教義に基づく人間心理の研究はもとより、エンゲイジド・ブディズムに見られる社会貢献や実際の布教活動などの実践を通じた心理学的研究を含めて、日本仏教が持つ普遍的可能性を模索していきたいと思えます。</p>		

<p><b>カウンセリング、心理療法</b> <b>（真宗カウンセリング、内観療法、森田療法等）</b></p>	<p>千石 真理</p>	<p>黒木 賢一</p>
<p>リーダー：心身めざめ内観センター主宰 千石真理、サブリーダー：大阪経済大学人間科学部 黒木賢一</p> <p>目標：仏教には「心身一如」という概念があるが、「カウンセリング・心理療法」分科会では、主に日本生まれの心理療法と呼吸法や気などの身体的実践を通じた東洋的アプローチの心理療法に焦点を当てる。</p> <p>分科会メンバーは、自らの心の内を観じ、身体（呼吸、動作、気など）活動の実践を体感しながら、心身を含んだ東洋の心理療法と西洋の心理療法の違いや共通する点など、議論を深めるとともに、文献、症例や研究などを紹介しながら、クライアントにより有効な手法を提供できるよう、研鑽してゆく。</p> <p>分科会メンバーへの期待：カウンセリング・心理療法を提供する側としてのセルフケアとして、メンバー自身が自己発見としての内観や身体感覚を楽しみつつ、分科会で新たに発見、構築したことを実践に生かし、社会貢献へと繋げていくことを期待しています。</p>		

<p><b>仏教と心理学の運動史（人物史、思想史、実践史）</b></p>	<p>葛西 賢太</p>	<p>加藤 博己</p>
<p>「運動史」分科会では、「仏教と心理学との対話」に尽力した人々の仕事や人生に触れ、仏教心理学の歴史をあきらかにしていくことを目指しています。</p> <p>論文や図書、その他の文献をひとつひとつあたっていく地道な研究作業が基盤になりますが、同時に啓発のため、仏教心理学史を学ぶセミナーや講演などの実施を考えております。</p> <p>当面のリーダーは、葛西賢太（宗教情報センター／上智大学グリーンケア研究所）と、加藤博己（駒澤大学文学部）が担当させていただきますが、研究（成果の発表も）・運営（連絡や行事運営のボランティア）・一般参加のいずれも歓迎し、有意義な時間を定期的に持ちたいと考えております。</p>		

<p><b>教育（仏教教育、道徳・倫理）</b></p>	<p>ケネス 田中</p>
<p>1. 目的や活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 心理学の理論や発見を仏教教育に導入。例：論理療法をもって仏教教義を説く。</li> <li>• 仏教の価値観（慈悲、無常観、無我観等）を心理療法などに導入する。</li> <li>• 以上のような接点が見られる既存方法（例：内観療法、森田療法、ゲシュタルト療法、アサジオリ等）を分析し、新しい方法の構築への参考として活かす。</li> <li>• 未だあまり知られていない教育方法を検索、発掘する。</li> <li>• 全く新しい教育方法を構築する。</li> </ul> <p>2. リーダー＆サブリーダーの氏名、簡単な紹介</p> <p>リーダー：ケネス田中（武蔵野大学教授、専門：浄土教、アメリカ仏教）</p> <p>サブリーダー：募集中</p> <p>3. 分科会メンバーへの期待</p> <p>心理学と仏教の両領域の英知を採用し、お互いの理解を促進させ、また、社会の諸問題の解決に貢献できる教育方法の充実をめざす人を求める。二十世紀に発生した心理学は、現代的な世界観や方法論を有するので、それを活かし、二五〇〇年という歴史を持つ仏教の価値観や知恵をより多くの人々に伝達することを目指したい。</p>	

# メモ

第8回日本仏教心理学会学術大会 実行委員会

井上ウィマラ（大会長）、藤能成、黒木賢一、吉田悟、

藤野正寛、大山覚照、太田俊明、岡野さつき